

『レ・ミゼラブル』の作中人物

渡 辺 誠 一

『レ・ミゼラブル』 *Les Misérables* の作中人物は、《人間ではない》という非難の言葉に時々ぶつかる。ヘロベール Flaubert, Gustave やボードレール Baudelaire, Charles も同じようなことを言ったが、まさにその通りである。彼等は特別仕立ての人間である。ある者は、その同情心や愛の強さにかけては人間以上であり、また、ある者は、その冷酷さや卑しさにかけては人間以下である。現実にはどうも存在しえないような怪物的な人間である。ここに出てくる人物は、すべて、極端に典型化され、理想化された人間である。だが、こういった作中人物が、物語の流れのなかで生き生きとした精神生活をもって存在し、我々読者の心を強くとらえ、我々の脳裡にいつまでも生き続けているのは何故であろうか？ 例えば、ほんのわずかししか出現しない フェリックス・トロミエス Tholomyès, Felix の姿が、その簡単な描写にくらべて、いつまでも我々の眼に焼きついて離れないのは何故であろうか？ ユゴーは、彼の未来の姿を次のように述べるだけで、その後、一切彼にはふれていないのである。「ルイ・フィリップ王 le roi Louis-Philippe の時代には、地方の有力な代訴人、権力も金もある代訴人であり、賢明な有権者であり、非常に厳格な陪審員であった。だが、あいかわらず道楽者であった。」¹⁾ また、「道德の番人と門番」 *gardienne et portière de la vertu* であるヴィクチュルニャン夫人 Madame Victurnien の場合も同様に、その描写に含まれている以上のことが我々の心に残っているのは何故であろうか？ ユゴーは、彼女の過去

を簡単に紹介するだけである。「不思議なことだが、このおばあさんにも若い時があったのだ。娘の頃、93年のさいちゅうに、彼女は修道院から抜け出た修道僧と結婚した。彼は赤い革命帽をかぶり、ベルナール会からジャコバン党へと乗り移った男であった。彼女は、そっけなく、気むづかしく、強情で、怒りっぽく、とげとげしていて、毒でも含んでいそうだった。それでも、亡くなった修道僧のことは、つまり、自分をすっかり飼いならし、従わせていた亭主のことはなつかしく思い出していた。僧服に押し潰されたイラクサのようだった。王政復古の時代には、信仰にこりかたまっていたが、非常に熱心だったので、司祭たちも、彼女の亭主である修道僧の罪を赦してやった。²¹⁾」

ユゴーは、ウォルター・スコット Scott, Walter を論じた評論のなかで、次のように述べて、小説と詩の融合した新しい文学形式の創造を表明している。「ウォルター・スコットの絵画的ではあるが、散文的である小説の後に、まだ創造すべき別の小説が残っている。それは、我々によってさらに美しく、さらに完全なものとされなければならない。それは、劇であると同時に叙事詩であり、絵画的であるが詩的であり、現実的であるが理想的であり、真実であるが偉大な小説である。つまり、ホメーロス Homère のなかにウォルター・スコットをはめこんだような小説である。²²⁾」

これは、ユゴーの生涯を通じて変わらなかった主張であるが、特に、晩年の作である『レ・ミゼラブル』に於て、完全に生かされている。このことに関しては、『《レ・ミゼラブル》に於けるポエジイ²³⁾』*La Poésie dans Les Misérables* が詳細に語ってくれるが、ボードレールも、『ロマン派芸術』*L'Art romantique* のなかで次のように述べている。「本書（『レ・ミゼラブル』）の文学形式は、小説というよりも、むしろ詩に近いものであるが、……これは、詩と同じ手法で構成された小説である。……ヴィクトル・ユゴーがこの小説を企て、組み立てた方法、つまり、一般には特別な

諸作品にあてられるはずの豊かな要素（抒情的感覚、叙事詩的感覚、哲学的感覚）を渾然たる熔解のなかに投じて、新しいコリントスの金属を作り出した方法は、ここでもまた、彼の宿命を確認させてくれる。つまり、古風のオードや古風な悲劇をある一定の点まで、つまり、我々の知っている詩篇や劇にまで変形させるに至った宿命を確認させてくれるのである⁵⁾。『レ・ミゼラブル』は、小説というより、『諸世紀の伝説』*La Légende des Siècles*、『サタンの終り』*La Fin de Satan*、『神』*Dieu* などの部類に属する叙事詩とすることができるのである。したがって、その作中人物は、豊かで力強い叙事詩的想像力によって、それぞれ生命を与えられ、魂を吹きこまれており、叙事詩的な神話に認められるあの原始的な偉大さを持っているのである。つまり、ジャン・ヴァルジャン Valjean, Jean は、超人的、怪物的人間ではなく、叙事詩に於ける巨人なのである。

『レ・ミゼラブル』の作中人物は、その非現実性によって、度々非難を受けているが、『諸世紀の伝説』のなかで極端に誇張された、並はずれた人物、ロラン Roland, エームリヨ Aymerillot, エヴィラドニユス Evi-radnus, サテュロス Satyre 等々と同じく、偉大な叙事詩的人物なのである。「ある詩篇の理想化された人物が、いかに巨大であろうと、その輪郭や挙動がいかに決然たるものでであろうと、我々は、やはり、彼等も人生の現実的人物と同じようにスタートを切ったと思わなければならない⁶⁾。」

モロワ Maurois, André は、『レ・ミゼラブル』の非現実的な作中人物について、次のように述べている。「ユゴーは、なんでも並はずれたもの、芝居がかったもの、巨大なものが好きだった。もちろん、単にそれだけでは、とうてい傑作を生むことはできなかったであろう。ところが、ユゴーの場合には、それらはすべて、けだかい真実の感情で裏づけされていた。ユゴーがミリエル猊下を敬愛していたのも、ジャン・ヴァルジャンを愛していたのも、またジャベールに畏怖の念を抱いていたのも、嘘いつわりからではなく、真実にそう思ったからなのであった。法外な空想力と作家とし

ての誠実さとがかくも見事にとけあったからこそ、ひとつの真実の小説が生れてたのだと言うことができるだろう”。」

モロワのこの意見は、「真実なものを通して偉大なものを、偉大なものを通して真実なものを⁸⁾」引き出そうとする詩人の意図を適確に裏づけるものとして、注目に値する言葉である。

こうして創造された様々な生きた抽象的人物、理想化された人間像は、それぞれ作品の内部で強烈に息衝き、叙事詩的な高さにまで高められているが、ギュイヤール Guyard, Marus-François は、この作中人物を「典型化された個人」individualités typisées (ビャンヴニユ 祝下 Mgr Bienvenu), マリウス Marius と「個別化された典型⁹⁾」types individualisés (ジルノルマン Gillenormand, ガヴローシュ Gavroche) というふたつの類型に大別するが、その区別は明確なものではなく、極めて曖昧である。

ジャン・ヴァルジャンは、素朴で無垢な野人であるが、彼の宿命と彼の精神的道程は、とても普通人では耐えられないほど、厳しく、極端なものである。典型的な徒囚として、彼は社会を呪い、とぎすまされた憎悪を武器として、社会に償いをさせようと決心して刑務所を出るが、神のような愛に満ちたミリエル Myriel 司教の徳にうたれて、良心に目覚める。彼は、その後、自分の良心と自分に課せられた義務に従って生活するが、その精神的、肉体的苦難は、とても想像も及ばないものである。彼はどんな困難にぶつかっても、決してへこたれない、不死身の超人であると同時に、人間に課せられた義務を完全に遂行した典型的な人物なのである。

『レ・ミゼラブル』の冒頭を明るく照らしているデーィニユ Digne の司教ビャンヴニユ 祝下は、近代社会を当然司らなければならないあの精神状態の象徴であるが、極めて誇張的な慈悲と自己犠牲の信念を生涯抱き続けた人物である。彼は、一切のものを与え、自分のものは何ひとつ持たず、常に休みなく、惜しみなく、貧者や弱者や罪人にさえも、己が一身を犠牲に捧げるという福音書の実践にひたすら努力を重ねた典型的人間である。

権威を尊敬し、反逆を憎むというふたつの感情きり持っていないジャベール Javert 刑事は、厳格苛酷な正義そのもので、いまだかつて情状酌量ということを知ったことのない野蛮な理智の持ち主であり、無慈悲な掟そのものである。彼は、ひとたび法の敷居を越えて悪の世界に入った者には、すべて深い軽蔑と反感と嫌悪とをおぼえるのだった。絶対に譲らず、例外は一切認めなかった。正義に飢え、済度という言葉とはまるで縁のない典型的な人非人であり法的人間である。

ガヴローシュ Gavroche は浮浪少年であるが、ただの浮浪少年ではなく、社会が生み出したパリ全体の浮浪少年を代表する人物である。ガヴローシュという呼び名は、すでに浮浪少年の代名詞のようなものになっている。彼はテナルディエ Thenardier の息子であり、モンパルナス Montparnasse の友達であり、愛国者である。

この他、母性愛のすさまじい化身であるファンチーヌ Fantine、悪徳の権化とも云うべきテナルディエ、革命の天使であるアンジョルラス Enjolras 等々数多くの人物がいるが、これらの大部分は、極端に典型化され、理想化されて描き出されている。

ここで、こういった作中人物の関係について少し考察してみよう。まず、ジャン・ヴァルジャンとテナルディエとジャベールとの関係をみてみよう。

ジャン・ヴァルジャンとジャベールとの関係は、「被害者をまず捕えておくべきなのだが」 *On devait toujours commencer par arrêter les victimes* や「目ききにもマリユスは死んだように思われる」 *Marius fait l'effet d'être mort à quelq'un qui s'y connait* を読めば解るように、テナルディエとジャベールとの関係と同じである。つまり、ジャンもテナルディエも、つねにジャベールにつけ狙われ、法の手に渡されようとしている人物である。また、ジャンとテナルディエは、ゴゼット Cosette と同じ関係にある。両者はファンチーヌから子供（コゼット）を託されるが、このふたりは、この子供を中心にして、激しい争いをする。一方は、金銭的な面か

ら子供の父親であることを強調し、他方は、母親（ファンティーヌ）に対する義務を果たすために子供の父親であることを主張する。モンフェルメイユの森で、両者が対立した時、杖を武器にテナルディエに立ち向かうジャンの形相や、ジョンドレット Jondrette のあばら屋でジャン・ヴァルジャンの示す態度は、まさに、真の子供をかばう父親の態度である。同様に、この両者は、マリユスとも深い関係にある。

マリユスは、テナルディエが戦場で負傷した父親を背負い、父親の命を救ったことで、テナルディエに対して限りない恩義を感じているが、他方、ジャン・ヴァルジャンに対しても、バリケードの戦場から自分を背負い、自分の命を救ったことで、大きな負債を感じている。

ファンティーヌはコゼットの優しい母親であるが、テナルディエ夫妻は、コゼットの継母であり継父である。また、ジャン・ヴァルジャンもコゼットの母親であり父親である。つまり、コゼットはジャン・ヴァルジャンの娘であると同時に、テナルディエの娘であり、エポニーヌ Eponine とは義理の姉妹ということになる。この姉妹は、どちらも同じように、マリユスを愛している。また、テナルディエの息子のカヴローシュと、ジャン・ヴァルジャンの息子となるマリユスとは、互に手を結びあって、バリケードの戦場で戦う。このように、『レ・ミゼラブル』の作中人物は、直接的であろうと、間接的であろうと、ジャン・ヴァルジャンを中心に、まるでつづれ織の縦横の糸のように、この作品に織り込まれていて、その筋の発展に大きな役割を果たしている。また同時に、その筋の緊密な結びつきを強固にしているのである。

九一 ブロッシュ Brochu, André は、この作中人物の組織を太陽系¹⁰⁾にたとえている。太陽はジャン・ヴァルジャン、惑星はミリエル司教、ファンティーヌ、コゼット、マリユス、テナルディエ、ジャベール、衛星は、トロミエス、ジルノルマン Gillenomand, ポンメルシー大佐 le colonel Pontmercy, そして、彗星は、ナポレオン Napoléon, ルイ・フィリップ, カ

ンブローヌ Cambronne, ブリュヌゾー Bruneseau である。こういった作中人物からなる星は、ジャン・ヴァルジャンという太陽を中心にして、自然界に於ける星と同じに、それぞれ直接にまた間接に、太陽と深い関係を保ちながら、各自の運行を続けているというのである。これは大変興味深いとえであり、作中人物の関係が、おおまかではあるが、はっきりとうちだされている。だが、わたしとしては、ミリエル司教の位置（惑星）に何か疑問を感じる。確かに、ミリエル司教は、惑星のひとつにたとえられる重要な人物であるが、どう考えても、ジャン・ヴァルジャンという太陽の周囲を運行する、つまり、ジャン・ヴァルジャンを中心として動く星にはたとえられない。かえって、その逆の働きをしていると云える。勿論これは、形式的な面からではなく、精神的な面から、また、内部的な面から考察した場合のことであるが。

『レ・ミゼラブル』の全体を通して、ミリエル司教の姿は、最初の部分と、第一部第五編「喪に服すマドレーヌ氏」*M. Madeleine en deuil* に於てしか現われないが、実際は、『レ・ミゼラブル』全体にわたって出現していると云える。つまり、ミリエル司教は、ジャン・ヴァルジャンにとっては、「自分の身体ではなく、自分の魂を救うこと、正直で善良な人間にもどること、正しい人になること¹¹⁾」を教えた人物であるが、彼の存在は、天使のように絶えずジャンにつきまとい、ジャンの良心をじっと見つめる光となっているのである。その光は、ある意味では、ジャンが生涯肌身離さず保ち続けた銀の燭台（ジャンにとっては、金の燭台であり、ダイヤモンドの燭台である。普通のローソクも、それに立てられると教会の大ローソクとなる）から発していたとも云える。したがって、ジャンが苦境に陥り、暗闇のなかで良心に組みつかれた時には、いつも良心を輝かす光となって、その姿を現わすのである。

「すると同時に、こういった幻覚を通して、神秘的な深みのなかに、一種の光が見えてきた。最初は、その光を松明だと思った。だが、さらに注

意深く、彼の意識に現われてくるこの光を見つめていると、その光が人間の形をしていて、その松明があの司教であることがわかってきた。

彼の意識は、このように自分の前に置かれたひとりの人間、司教とジャン・ヴァルジャンをかわるがわる見つめた。後者をうちくだいて溶かしてしまうためには、どうしても前者が必要であった。こういう忘我状態によくあるあの不思議な効果によって、彼の夢想が続くにつれて、司教の姿はしだいに大きくなって、彼の眼に輝きわたり、ジャン・ヴァルジャンの姿はしだいに小さくなって、薄れていった。しばらくすると、彼はひとつの影にすぎなくなった。突然、彼の姿は消えてしまった。そして司教だけがあとに残った。¹²⁾」

だから、死にもの狂いの苦闘の最中に、ジャン・ヴァルジャンは、時には、「あの光にうちたおされて赦しを請い、司教によって彼の内部や頭上にもとめられたあの執念深い火が、めくらのままで¹³⁾」いてもらいたいと願うのである。だが、その光は、無理矢理にジャンの心に入りこんで、良心をまぶしく照らし出すのである。

結局、司教の存在は、ジャン・ヴァルジャンの内部に深く入りこんだ善の原動力であり、ジャンの内部を明るく照らし、ジャンから光を発散させる光の根源なのである。それは、『サタンの終り』に於ける天使リベルテ Liberté と同じ存在である。

ここで、ジャン・ヴァルジャンとミリエル司教をさらに深く追究し、この両者の関係を考察してみよう。

ミリエル司教は、「誇張された慈悲であり、自己犠牲に対する不滅の信念であり、最も完全な教化手段と考えられた〈慈悲〉に対する絶対の信頼である。この典型的人物の描写には、驚嘆すべき微妙な調子と筆致が見られる。作者は、この天使のような人物を仕上げるのにすっかり満足していたようである。ビヤンヴニユ猊下はすべてを与え、自分のものは何一つ持たず、常に休みなく、惜しみなく、貧しい人に、弱い人に、そして、罪人

にさえも、自己を捧げるということ以外の喜びを知らない。教義の前にはつつましく頭を下げるが、それを深く究めようとはせず、もっぱら福音の実践に専念したのである。〈法王至上権論者というよりは、むしろフランス教会派の人〉で、それに、社交場裡の人であり、ソクラテスのように、皮肉と洒落の能力に恵まれた人物である。¹⁴⁾」

この人物のモデルは、1806年から1839年までディーニュの司祭をつとめた実在の人物、ミオリス猊下 Mgr de Miollis であるが、彼もまたミリエル司教に劣らず高德な司教であり、普通の人から見たら、あまりにも美し過ぎる美德の持ち主である。

シャルル・フランソワ・ビヤンヴニュ・ド・ミオリス Charles-François Bienvene de Miollis は、1753年エックス Aix に生まれ、後に神学博士となるが、フランス革命時代には、革命政府に仕えることを嫌い、イタリア Italie に亡命する。やがて、ナポレオンと法皇庁との間に和議が成立したのを機会に、ふたたびフランスに帰り1804年、ブリニョル Brignolles の司祭となる。その後1805年、ナポレオン Napoléon から突然ディーニュの司教に任命されるが、これは、彼の弟のセクスチュウス Sextius 将軍の推薦によるものだと言われている。作中のミリエル氏がディーニュの司教になったいきさつも、ミオリス氏の場合と同様に、最終的には、ナポレオンからの任命によるものだが、弟の推挙という点に関しては違っている。「ナポレオンの戴冠式の頃、彼は、いまとなっては何であったのかよくおぼえていないが、主任司祭としてのちょっとした職務上の用事でパリに出かけた。彼は、多くの有力な人々の間でも、特にフェッシュ枢機卿のもとへ行き、教区民のために請願を行なった。ある日、皇帝が叔父にあたるこのフェッシュ氏をたずねてきた時、この立派な司祭は控え室で待たされていたのだが、偶然に皇帝がそこを通るのに出会った。ナポレオンは、この老人が自分をものめずらしそうに眺めているのを見ると、ふりむいて、だしぬけにこう言った。

〈わしを眺めているこの老人は何者か？〉

〈陛下〉とミリエル氏は言った。〈陛下はひとりの老人をごらんになり、わたしはひとりの偉人を眺めております。わたしどもはおたがいに、なにかのためになる訳でございます。〉

皇帝は、その晩、枢機卿にこの司祭の名前をたずねた。それからまもなく、ミリエル氏は、ディーニュの司教に任命されたことを知り、ひどく驚いてしまった。¹⁵⁾」

ミオリス司祭は、ナポレオンからのこの発令に驚き、サン・シュルピス (Saint-Sulpice) 修道院長のところに相談に行くが、院長は、彼のあまりにも無欲な恬淡ぶりに感嘆し、逆に、司教の職につくことを推めたと言われている。彼の生活は、作中に述べられている通りに、高位聖職者という身でありながら、というよりも、そのために高位聖職者であると云えるのであるが、貧窮の生活に自ら甘んじ、徹底した禁欲主義を貫き、慈悲深く、すべての人に己が身体を犠牲にするという典型的聖者の生活である。彼の人格は、配下の司祭や信者をはじめ、ディーニュ地方のすべての人々から〈父〉として慕われ、特に彼の朴訥な話しぶりは、誰からも好感を持たれていたと言われている。

彼は80歳を過ぎてからも、山の多い、道のほとんどないようなディーニュの司教区を巡廻し、人里離れた信者たちの家を訪れ、彼等に福音と慰めを与えていたが、こういったことは、すべて『レ・ミゼラブル』に述べられている通りである。85歳になって、彼はその職を辞し、生まれ故郷のエクスに隠退し、1843年、90歳で亡くなっている。

ミオリス司教が、作中のミリエル司教にそっくりな、慎しく、慈悲深い人物であったことについて、当時ディーニュ地方を旅行していたカトリック信者のモンタランベール Montalembert という人が、その旅行記の中で次のように述べている。「彼は、質素な人目につかぬ邸に住み、飾り気のない、しかし力強い言葉で語る昔の典型的な司教だった。……私は心か

らこの司教の前にぬかずき、その祝福をもとめた。¹⁶⁾」

ところが、1862年4月、ユゴーは、この司教をミリエル司教のモデルに使ったために、ミオリス猊下の甥、フランシス・ド・ミオリス Francis de Miollis から、次のような非難の手紙をもらうことになった。つまり、『レ・ミゼラブル』で述べられているミリエル司教の家柄、家族、習慣、慈愛あふれる性格、福音書的な徳、こういったことは、すべて、叔父のミオリス猊下と一致する。「第一、小説に出てくる司教の名前と実在の司教の名前とが同じであります。第二に、ユゴー氏は、ミリエル司教がプロヴァンスの高等法院の息子であり、1804年にブリニョルの主任司祭であり、1806年にディーニュの司教になったと書いております。またさらに、この司教は、ビヤンヴニュ（歓迎された人）という親しみのある名のもとに知られており、彼には二人の兄弟がいたとも書いております。一人は陸軍中尉であり、一人は県知事である。この知事は勇敢で立派な人であり、隠退してからは、パリのカセット通り rue Cassette に住んでいたと書いております。こういったことに関する詳細は、すべてわたしの尊敬している叔父に非常に良く似ております。ユゴー氏が語っているこの知事は、わたしの父だったのです。父は、実際、カセット通りに住居を持っておりました。」……だが、事実とまったく反したことを記述する権利は、ユゴー氏にはありません。ユゴー氏は、シャルル・ミリエルがばかに早く、18歳か20歳で結婚し、結婚してからも、浮いたうわさの種を派手にまいたと記述いたしております。だが、これは完全に間違っております。「シャルル・ビヤンヴニュ・ド・ミオリスは、一度も結婚したことはありません。彼の青年時代と司祭職についていた時期は、最も熱心な信仰心と模範的な規律正しさでみんなに知れわたっております。……従って、彼の人生の門出の頃は、社交界と色恋ざたにあけくれたなどということはありませんでした。」また、ユゴー氏は、司教と自由思想家との議論、特に、国民公会議員との議論に於て、司教が相手の意見を承認したと、また、彼の臨終の際に、ひざ

まづいて彼を祝福したと書いておりますが、そんな事實は、ミオリス司教には絶対にありませんでした¹⁷⁾。……

これはミリエル司教に対してばかりではなく、すべての作中人物に対して言えることだが、たとえ作中人物にモデルがあったとしても、その作中人物がモデルそのものでないことは誰でも知っていることである。つまり、ミリエル司教はミオリス司教ではないのである。ミオリス司教の言動や生涯がそっくりそのままミリエル司教に通じるとは限らないのである。「いくら事実にもとづいているとはいえ、現実世界が提供するモデルというのは、ごく漠然としたおおざっぱなものであるにすぎない。芸術家はそれに明暗をつけ独自の個性を作りあげるのである¹⁸⁾。」したがって、ミリエル司教は、ユゴーの豊富で強烈な創造的想像力から生まれた、ユゴーの理想的司教なのである。「ユゴーは、ピャンヴニユ司教より、人間的にはるかに劣っていた。それは私もよく承知している。だが、さまざまなもつれあった情念につきまとわれながらも、この地上の子は、あのような超人的な聖者を創造したのである。¹⁹⁾」

ジャン・ヴァルジャンもまた、ユゴーの創造した典型的な超人であるが、彼のモデルとなった人物は、ピエール・モーラン Maurin, Pierre という前科者である。彼の経歴は、『レ・ミゼラブル』の最初の部分で述べられているジャン・ヴァルジャンの経歴に大変似ているが、その大部分はユゴーの創作によるものであり、ジャン・ヴァルジャンの内心は、ユゴーの表象である。このことは、特にジャンの精神的激動を描いた「頭のなかの嵐」 *Une tempête sous un crane*, 「おしゃべりな吸い取り紙」 *Buvard, bavard* に於ける文体を考察すれば明らかになる。つまり、そこでは、「わたしがここでその苦悩をお話ししているこの不幸な男を支配していた二つの思考が、これほど深刻な闘争を始めたことはいままでに一度もなかったことである。²⁰⁾」という前置きの後、その大部分がジャン・ヴァルジャン

の間接的な話法によって進められているが、すべてユゴーの言葉によって被われているのである。したがって、次の言葉は、ユゴー自身の思考であり、ユゴーの〈進歩〉に関する哲学的事項でもあるのだ。「自首して、こんなにも悲痛な人違いに打ちひしがれたあの男を救い、またもとの自分の名前にかえり、義務として、ふたたび、徒刑囚ジャン・ヴァルジャンになるなら、それこそ、ほんとうに自分の復活をなしとげることになるし、自分の抜け出そうとしている地獄の扉を永遠に閉ざしてしまうことになるのだ！ うわべは、ふたたび地獄に陥いることだが、それは、実際には、地獄から抜け出すことになるのだ！」²¹⁾

さて、ジャン・ヴァルジャンのモデル、ピエール・モーランは、1801年にフォルカルキエ Forcalquier でパンを盗み、逮捕されて投獄されている。このパン泥棒に関しては、ユゴーは、ピエール・モーランの場合だけではなく、実際にその事件を目撃している。「(1846年) 2月22日、昨日、私は上院に向かって歩いていた。太陽の出ている良く晴れた12時頃であったが、大変寒かった。私は、トールノン通り rue de Tournon で、一人の男が二人の兵士に連行されてくるのを見た。この男はブロンドの髪の毛をしており、顔は蒼白く、やせ細り、物凄いの形相をしていた。30ぐらいの歳恰好で、厚ぼったいズボンをはいていた。靴下をはかずに直接木靴をはいた両足は擦りむけていて、靴下代りに踝にまきつけた布切れは血だらけであった。短い仕事着を着ていたが、その背中泥でよごれていた。それは、彼がいつも道路の舗石の上に寝ていることを示すものであった。無帽で、髪の毛は逆立っていた。腕には一本のパンを抱えていた。……その男は、もう、私にとっては、一人の人間ではなかった。それは、惨めさの亡霊であった。」²²⁾

監獄に入ったモーランは、ジャン・ヴァルジャンのように何回も脱獄を企てるというようなことはせず、判決通りの五年の刑期をつとめあげ、自由の身になるが、黄色のパスポートを持った彼を迎えてくれる者は誰もい

なかった。ある晩、ミオリス司教の司教館の扉をたたいた。彼は、ジャン・ヴァルジャンと同じように、司教から歓待を受け、その夜のうちに良心を入れかえるが、小説の主人公のように、銀の食器を盗むようなことはしなかった。彼は、司教の兄弟であるミオリス將軍に紹介され、その將軍のもとで看護卒として献身的に働き、軍務に努めたが、その後、ワーテルロー Waterloo の戦いが始まると、それに参加し、そこで死んだと伝えられている。

ところで、ユゴーは、『レ・ミゼラブル』が宗教的な作品であることを強調しているが、その宗教はジャージー島 l'île de Jersey 滞在時代に完成したものである。それは、簡単に言えば、次のようなものである。この世に於ける存在物は、すべてそれらの持つ悪の意識や物質の重量に従って龐大な階級に分れる。石から植物へ、植物から動物へ、動物から人間へ、人間から天使へ、天使から神へと次第に位は上がって行く。この階級は、恐怖と滅亡の世界、怨霊や罪惡のひしめく深淵で始まる。そこは地獄の底と呼ばれ、悪魔たちは鎖につながれ、悪は生きている恐るべき靄を吐き出し、七頭蛇は星のうろこをつけた体をのたうちまわし、渦の波の中に呑み込まれている。そこには、「恐るべき黒い太陽があり、夜が光を放射している。²³⁾」この世界の王はサタンである。これとは逆に、階級の最上位を占めるのは、歓喜の世界、光の深淵である。ここは天国と呼ばれ、光から生まれた天使たちは光輝の翼に乗って壮麗な天空を天翔け、善なる魂はその額を至高者の輝く足ゆびに触れ、すべてが歌、香、炎、まぶしさである。そこには、目眩く太陽があって、永遠の光を放っている。この世界の王は神である。そして、ユゴーの理想は、地上の全存在物が自分の内部にある悪の要素を善の要素で打ち負かし、すべてが「悪から善への、不正から正義への、虚偽から真実への、夜から昼への、欲望から良心への、腐敗から生命への、獸性から義務への、地獄から天国への、虚無から神への前

進²⁴⁾」となることであった。出発点は物質だが到着点は魂となること、最初は七頭蛇だが、最後は天使になることであった。このことから、『レ・ミゼラブル』は、ジャン・ヴァルジャンの劇的な上昇運動を扱った小説とも言える。つまり、多くの危険と迫害と苦悩を経て、ミリエル司教の持つあの偉大さ、あの慈悲、あの静穏さに到達し、ついには、神のもとにまで昇って行くジャン・ヴァルジャンの姿が描かれているのである。

ジャン・ヴァルジャンは、徒刑囚という条件のもとに、「犬にもなれない男²⁵⁾」として、社会階級の最下位に陥いらされ、そこから上昇運動を開始するのであるが、ミリエル司教もまた、ジャン・ヴァルジャンと同じような過程をたどる。

ミリエル司教は、「善行」そのものとして、「正しく、真実で、公平で、賢く、謙虚で、立派」で、「情け深く、親切」な人物として、また、彼の一日は、「正しい考え、やさしい言葉、良い行いであふれて」いるとして描かれているが、彼の過去は、「社交界と色恋ざたにあけくれた」日々、「イタリアへ亡命」、「一家の没落²⁶⁾」などによって、悪の社会に陥いることから始まっている。

彼の上昇運動は、心にある強烈なショックを受けることによって開始される。「彼の生活を占めているこういった遊びや情事のさいちゅうに、彼は、いきなり、こういう神秘的で恐るべきショックにおそわれたのであろうか？²⁷⁾」

司教の内心をゆさぶり、彼の良心を目覚めさせるショックとしては、この他に、彼が初めて処刑台を見た時のショックが挙げられる。「司教の受けた印象は、ものすごく深いものであった。処刑の翌日も、また、ずっと後になってからでも、ミリエルはうちのめされていたようだった。²⁸⁾」

最後に、ミリエルは、聖職につき、立派な尊敬すべき司教となるのだが、これは、彼の人生の変更を示すと同時に、精神的な上昇を暗示している。勿論、この他、さまざまなエピソードがこれに結びつく訳であるが、以上

の過程を簡潔に示すと、次のようになる。

〈浮いた生活、没落、亡命〉→〈心に受けたショック〉→〈聖職に就任〉

下 降

内心の対立
(良心の目覚め)

上昇

ジャン・ヴァルジャンの場合を考えてみよう。ジャン・ヴァルジャンの過去も、困窮状態からパンを盗み（悪行）、有罪の判決（下降）を受けることから始まる。彼は、復讐の鬼となって出獄し、ディーニュに到着する（彷徨；下降）。そこで、ミリエル司教と出会う（ジャン・ヴァルジャンの良心の闘いの始まり）。銀の食器を盗む（悪行）。司教の美しい嘘によって救われ、光が与えられる（良心の点火）。その後、この光に支えられて、ジャンの魂は少しずつ向上するが、その毎日の生活は、内心の悪と闘う厳しい贖罪の生活となる（内心の対立、良心の闘い）。これに伴うジャンの自己犠牲は、とても人間業とは考えられない、極めて悲惨なものである（善行）。ジャン・ヴァルジャンの死。「手足の力が抜け、身体の衰弱がひどくなるにつれて、魂の荘厳さが現われ、額の上に広がっていた。未知なる世界の光が、すでにその瞳のなかに見えていた。²⁹⁾」（最終的な上昇）。このジャンの過程は、おおまかに区分すると、次のようになる。

〈入獄、出獄、ディーニュに到着〉→〈司教との出会い、その後のジャン〉→死

(下 降)

(内心の対立
良心の闘い)

(上昇)

この過程は、ミリエルのそれと同じものであるが、同時に、「サタン」や『諸世紀の伝説』の過程でもある。つまり、これらの人物は、いずれも、ユゴーの同一の宗教的世界観によって描き出されているのである。多くの苦悩を経て、暗黒から理想へ、暗闇から光明へ向かって上昇する人間や人類の姿が描き出されているのである。

ところで、このようなジャン・ヴァルジャンとミリエル司教の類似は、一読しただけでは気づかないが、肝心な両者の違いは、容易に気づくであろう。つまり、ミリエル氏は、改心の後、純粹な善行者として、その役割を果たし、立派な聖者として、ただひたすらに愛の実践に努めたのである。そのひかえめな人類愛は、物語の発展に伴い、ジャン・ヴァルジャンの内心に於ける善と悪との闘いにその中心を移して行くのであるが、結局、ジャン・ヴァルジャンは、自己犠牲によってしか他人を救うことができないのであり、また、自分自身をも救うことができないのである。つまり、ミリエル氏は聖人であり、ジャン・ヴァルジャンは殉教者なのである。

「わたしは、福音書を最高の人間の行為について語った書物としてみとめる。〈おまえを愛してくれる人間だけを愛するのなら、愛なんてたいしたものではない。〉わたしたちは、わたしたちを人間という自分達の足の上に、真っ直ぐに立たせるために、あのジャン・ヴァルジャンと司教との称賛すべき物語をもっている。わたしたちはああした場でこそ、自分を鍛えねばならぬのだ。どんな些細な言葉にさえ臭ってくる強制と不法の精神は、ただもうやみくもに嘲笑をもってユゴーを攻撃し、毒するのをやめようとししないのに注意されよ。これは人間嫌いの、どたん場のあがきであり、また、ことを厄介払いするために、じつにうまくたくまれたものなのである。しかしわたしは、わたしの書物をもう一度とりあげる。そしてわたしの帆に風をはらませ、この嘲笑者たちを嘲笑するのだ。司教は、べつに徒刑囚が人間らしい態度をしめすことを期待などしていなかった。彼は反対に自分のほうから、一歩、つづいて二歩、ふみだしていった。こうして司教は他の場合も同様、ジャン・ヴァルジャンが身につまされるほどよく知っていた、（前科者というものが演じざるをえない）自分の役割を、配役を断念するように約束したのだ。そこにはもはや芝居などというものはなかったのだ。二人の人間がそこにいただけだ。³⁰⁾」

註

- 1) Hugo (Victor) : *Œuvres Complètes*.—Club Français du Livre, 1967～1970. Tome XI, P.154. (以後, Œ. C. と略記する)
- 2) Œ. C. Tome XI, P. 174.
- 3) Œ. C. Tome V, P. 131.
- 4) Meschonnic (Henri) : *La Poésie dans Les Misérables*.—dans Œ. C. Tome XI, P. XXV.
- 5) Baudelaire (Charles) : *L'Art romantique*.—Garnier, 1962. P. 801.
- 6) ibid. P. 804.
- 7) Maurois (André) : *Olympio ou la vie de Victor Hugo*.—Hachette, 1954.
『ヴィクトール・ユゴー』, 新潮社, 184頁
- 8) Œ. C. Tome IV, P. 754.
- 9) Hugo (Victor) : *Les Misérables*.—Garnier, 1963. P. XIV.
- 10) Brochu (André) : *Hugo*.—Les Presses de L'Université de Montréal, 1974, P. 123.
- 11), 12), 13). Œ. C. Tome, XI, P. 206, 129, 951.
- 14) 註 5) の書, P. 802.
- 15) Œ. C. Tome, XI, P. 54.
- 16) Montalembert (Charles Farbes, comte de), homme politique Français (1810～1870). 『レ・ミゼラブル』潮文庫, V, 565 頁.
- 17) Escholier (Raymond) : *Victor Hugo raconté par ceux qui l'ont vu*.—Stock, 1931, P. 307～309.
- 18) 註 7) の書, 178頁.
- 19) Alain : *Propos*. I.—Pléiade, 1969. P. 805.
- 20), 21), 22) Œ. C. P. 202, 206, Tome VII, P. 961.
- 23) Hugo (Victor) : *Les Contemplations*.—Garnier, 1962. P. 329.
- 24), 25), 26), 27), 28), 29) Œ. C. Tome, XI, P. 865, 98, 54, 54, 64, 995.
- 30) 註 19) の書, P.1236. (斎藤正直訳)